

特集 戦争と平和

残された人たちの戦争



石井さん(左上)が戦地にいる夫の武司さんへ向けて書いた手紙

昭和20年(1945年)8月15日、太平洋戦争は終戦を迎えました。

富士市の戦没者数は3697人。戦地へ赴き、戦った多くの人が命を落としました。

しかし、戦争で苦しんだのは戦地にいた人たちだけではありません。富士市に暮らし、残された人たちもまた、さまざまな思いを抱えた戦争の犠牲者です。

今回は、富士市で太平洋戦争を体験した人たちの声を特集します。



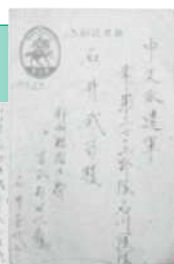
結婚当時の石井さん
(23歳)

「ようやく帰ってくる ずっと願っていた」



石井 喜代子さん (比奈)

結婚して2年半、息子が生まれて半年ほどたったころ、召集令状が届き、夫はあつという間に出征してしまいました。残された私は子ども1人を抱えて夫の両親や祖母、7人の兄弟と一緒に暮らしていました。夫の祖母の葬儀のとき、鈴川駅が戦闘機に爆撃され、家族と親戚みんなで慌てて畳の下に隠れたこともありましたよ。
夫の家族は息子の面倒を見てくれ、とてもよくしてくれました。でも、私は夫がいなくて、家族の中で自分だけが違うような気がして、心はいつも寂しく、たまりませんでした。
終戦を迎え「夫がようやく帰ってくる」と思い、あちこち聞いて探し回りましたが、夫は帰って来ませんでした。耐えられない気持ちでした。



戦争の激化により、夫に送ることができなかった手紙から

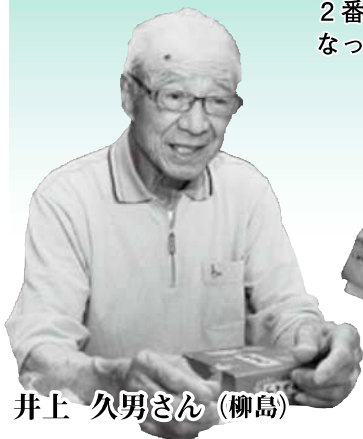
(一部抜粋)

今晚も義昭(息子)がお月様を見たがるので外へ出てみまうときれいにすんだお月様でした。一生懸命指さしては、なむなむと手を合わせる姿を見て、義坊のお父ちゃんも遠い遠い大陸でこの月を眺めてどんな気持ちでいるだろうねと言いつ聞かせて、また、自分に言い聞かせるような気持ちで…。
(中略)あれから丁度一年、昨年貴方からの初めての便りはこのごろでした。義昭はこのごろでは、しっかりと歩くようになります。

※召集令状…兵役義務のある人を召集する命令文書。赤い紙を使ったので「赤紙」とも言われた。

命がけの帰還 二度と会えなくなった弟妹

2番目の妹幸子さんが亡くなったときの葬儀の香典帳



井上 久男さん (柳島)

22歳で亡くなった一番下の弟俊行さんへの
「勲八等白色桐葉章」
くんはつとうはくしよくどうようしょう

私は6人兄弟の長男で、昭和16年、18年に従軍しました。中国で捕虜になりました。命から逃げるたことがありました。つらい3年間の従軍生活をやっと終え、帰りの電車から富士山を見たとき「生きて帰ってきた」という実感で涙が出ました。そのとき富士市に帰ってきたのは私だけだったので。しかし、家に着くと、2人の弟たちは戦地に出征した後でした。今どこで何をしているのかわからなくて心配でした。しばらくして一番下の弟から「船に乗って戦地に向かっている」と手紙が届きました。1通だけでした。
私は、沼津海軍工廠で航空無線機の部品をつくる仕事に通いながら、両親と2番目の妹と一緒に暮らしていました。
私が富士市に帰ってきて1年もたない昭和19年9月、一番下の弟が戦死したと公報がありました。翌年には、焼夷弾に当たったけがももどで、当時17歳だった2番目の妹も失いました。

毎日鳴る空襲警報 子どもたちと生きた日々



▲当時の今泉小学校
(提供：市立博物館)



先生をしていた
ころの青木さん▶

私は、昭和18年から今泉小学校で教師をしていました。戦争がひどくなつた昭和19年〜20年には、毎日空襲警報が鳴り、授業は1日1時間ほどしかできませんでした。警報が鳴ると、子どもたちと一斉に走り、目や耳を手でふさいで学校の周りを囲っていた生け垣のそばに伏せました。子どもたちも必死でした。教師みんなで学校にあつた防空壕くわうくわうに逃げ込み、難を逃れたこともたびたびあり、B29戦闘機がグラウンドに機銃掃射をしていったこともありましたよ。



青木 静子さん(富士見台1)

また、お昼の時間にお弁当を持ってこられない子どもがいました。そのような子どもがみんなから離れてかがみ込んでいる姿は今も忘れられません。こっそり自分のお弁当を分けていましたが、あとは水を飲んで我慢するよう言うしかありません。切なくて、ふびんになりませんでした。子どものお弁当が盗まれたこともあり、幼い子どもにそんなことをさせてしまう世の中を情けなく思いました。今でもB29戦闘機の爆音と子どもたちのことは心に焼きついています。もう二度とあんな経験はしたくないです。

※機銃掃射：機関銃で連射して目標を攻撃すること。

学徒動員で働いた毎日 戦争一色だった青春時代



鎌田 春子さん(岩淵)

私が学徒動員されたのは、学校に入学してすぐの昭和19年、15歳のときでした。富士宮市の野中にあつた日本火口かこうという工場で倉庫係として、荷物を出すための伝票管理などをしていました。

毎朝、まだ薄暗いうちから、防空ずきんとお弁当を入れたかばんを背負って、当時住んでいた岩本から入山瀬駅まで歩きました。そこから身延線で富士宮駅に行き、富士宮駅からは、動員された女子学生全員で4列の隊列を組み、軍歌を歌いながら50分ほど歩きましたね。

中には、師範学校の女子学生もいて、爆弾をつくっていたのでしよう、硫黄のようなもので黄色

くなつた、顔が隠れるくらいマスクをしながら働いていました。作業中に空襲警報が鳴り、防空壕に逃げ込んだこともありましたが、終戦後、学校に戻ることができましたが、卒業まではたった半年勉強したり、友達と過ごしたりした学生生活の思い出はほとんどありません。思い出されるのは、動員されたことばかり。青春時代は戦争一色の日々でした。

※学徒動員：国内の労働力不足を補うために学生を工場などで強制的に働かせること。

富士女子商業学校(現在の富士見高等学校)の卒業アルバム



▲学生のころ
の鎌田さん

父を知らずに育った幼少時代 私のような犠牲者を出さないために

私は父のことを知りません。私が生まれたとき、父は戦地にいました。母に届いた一通の手紙を最後に、父は戦地で亡くなりました。母と私は、中之郷の母の実家で親戚と一緒に暮らしていました。家は農家で、野菜などを分け合って生活していました。

母は幼い私を育てるのにいっぱいだったでしょう。3つ上の姉を千葉県の父の実家に預けていました。しかし、母は弱音を吐く人ではなく、私が大きくなつてからも父のことや大変だったことはまったく話しませんでした。

父がいないことで寂しい思いをしました。母の家族や親戚、近所の人など周りの多くの人に助けられて私は育ちました。本当に感謝しています。

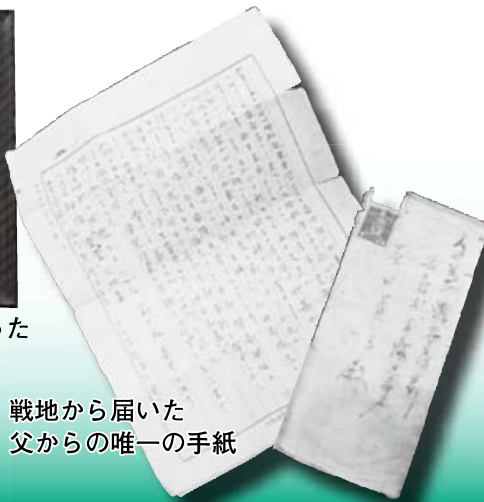
今、遺族会の活動をしています。私のように戦争で家族を亡くした方はたくさんいます。私たちのような犠牲者を二度と出さないために、今の若い人たちに戦争があったことを伝えていかなければならないと感じています。戦争を知り、平和について考えてほしいと切に願っています。



安田 善彦さん (中之郷)



戦地で亡くなった
安田さんの父



戦地から届いた
父からの唯一の手紙

戦争を知る

歴史民俗資料館「戦争とくらし」コーナーでは、常時、戦争に関する展示をしています。その展示が新しくなりました。

ところ／市立博物館分館歴史民俗資料館2階(伝法86-7)
展示内容／「富士市の戦没兵士たち」

「昭和の15年戦争にみる」
1931年～1945年の戦中に亡くなった富士市出身の9人の兵士の生涯を紹介し、出征風景や町葬の写真、関連資料などを展示(平成25年10月まで)。
入場料／無料

★ギャラリートーク開催

会場で展示物の解説をします。
とき／8月26日(日) 10時～



新しくなった展示コーナー

問い合わせ／市立博物館

☎(21)3380

戦争は、戦地に行った人だけでなく、
残された人たちにも
大きな傷跡を残しました。
あなたも、この夏、
もう一度、平和について
考えてみませんか。

